4　次の文章を読んで後の問いに答えよ。　　〈弘前大〉　二〇一四年度出題

　いうまでもなく、子どもは生まれてすぐに親を中心とする家族のなかで育つ。このなかで、食べること、あ排泄すること、眠ることをはじめ、生きものとして生きることの基本を身につけるだけでなく、他人との話し方、つきあい方、そこでの身ぶり、身ごなしなどの基本も身につけてゆく。［　Ａ　］、その過程でかならず対立が起こる。何に関しても抑制ということが求められるからだ。食べたいときに食べられない、好き放題にやれない……。他者の望んでいることとの調整が図られるからだ。そこで子どもはむずかる。むずかればめられる。叱られる。そして泣く泣くカシンボウする……。

　母と子のあいだのみならず、介護者と被介護者、子どもの集団のような、閉じられた場所で異なる人間がむきだしで接するとき、そこにはかならずといっていいほど確執や悲劇が起こる。だからそういう閉じられた場所では、むきだしでない関係、つまり人間関係のクッションといったものが必要になる。家族のなかで、相手を思いやる気持ちとか、礼儀やマナーやルールといったつきあいの作法とかが仕込まれるのも、１そういう理由からである。ひとは生まれ落ちてしばらくして、こうした共存の習慣の基礎となるものをしつけられる。

　が、そうした２「しつけ」の基礎には、まずは家族への信頼と安心というものにい浸れていることが前提となる。「［　Ｉ　］にかける」という仕方で、たっぷりと世話を受けた、ことあるごとにじぶんのことをかまってくれたという感覚がなければ、ひとは他者の命令に従おうとしない。信頼と安心の基礎、それが築かれるのは、じぶんがどういう存在であろうとじぶんがここにいるということだけで大事にされた、無条件に肯定されたという経験があってのことである。まわりの人間にことごとくこまやかに応対してもらった、手厚く世話してもらったという体験が、「しつけ」などの前提となる他者への信頼感を根づかせる。そして「存在の世話」とでもいうべきそのような経験が、自尊心の基礎となるものを育む。ここで自尊心とは、プライド（自負心）のことではなく、じぶんをキソマツにしない心、かけがえのない自己というものの経験のことである。これがあってはじめて、ひとは他者の思いへのやかな想像力を抱きうるようになる。

　「社会的動物」としての人間は、このように、その原型となるものをまずは家族のなかで経験する。そしてやがてとくに親密ではない人びととの関係のなかに出てゆく。いくつかの壁を超えながら。

　こうした経験が原型的であるのは、家族という場所において、ひとが〈いのち〉のベーシックスといったものに他者とともに深くふれるからである。それを欠いてはそもそも生きるということが成り立たないようなことがらに深くふれているからである。食べること、排泄すること、身を洗うこと、そして生まれること、病むこと、介護すること、死ぬことなどに、である。

　もっともそうした３〈いのち〉のベーシックスにふれる経験は、じっさいにはどんどん削除されてきている。たとえば、ひとが生まれるところ、死ぬところに立ち会ったひとはごく僅かになっている。ほとんどの妊産婦は分娩室で出産し、ほとんどのう逝去者は病院のなかで看護スタッフの手で清められる。新生児も遺体もわたしたちが面会するのは、そのあと、からだを整えられ、え産着もしくは死にお装束を着せられたあとだ。病の治療ということもそのほとんどが病院のなかでなされ、介護も施設にお願いすることが多くなった。生老病死だけではない。調理する、排泄するという、ひとのもっとも根本的ないとなみも、食べる瞬間、排便する瞬間以外は、なんらかのシステムに依っている。生き物を殺し調理する過程はすでにある程度なされ、排便後は下水道のシステムがすべてを処理してくれる。多くのひとは食肉がどのような過程を経てこういうかたちで提供されているかについてほとんど［　Ⅱ　］をなくしているし、他人の便を見たことがないという子どもも少なくない。そして、それを欠いては生きるということが成り立たないようなことがらが、家族生活のなかにあたりまえのように登場しはしないということになると、わたしたちの社会的な存在それじたいが危うくなる。

　人類の多くがその社会生活のうちに、〈家族〉というものをもっとも根源的なメタファー（ルート・メタファー）として設定してきたのも、そうした理由によるとおもわれる。父と母と子とそのきょうだい（ときには祖父と祖母も入る）からなる家族のイメージは、じっさいの家族のみならず、 ［　Ｂ　］「親分」「兄貴」「姉さん」というふうにやくざの組織にも転用されるし、スポーツのチームにおける「監督」「コーチ」「主将」「マネージャー」もそれぞれ、父、叔父、兄、母ないしは姉のイメージにも重ね合わされる。男子校、女子校においても、あるいは相撲部屋や宝塚歌劇団のような単一の性からなる集団においても、父親役、母親役、そして子ども役がおのずと生まれる。〈家族〉のメタファーは［　　　　Ⅲ　　　　］。

　家族にひとり「クヤッカイモノ」がいると、［　Ｃ　］家族は一つにまとまりやすいということも、人類の社会関係には根深い事実としてある。ぐうたら親父でもいいし、できの悪い子でもいいし、病人でもいい。最後の例はまことに残酷な事実であるし、世話や看病にあたる者にはたまらない現実であろうが、そのひとを中心に置き、そのひとに視線を結集することで「われわれ」という結束が固まるということはある。脳外科の集中治療室における、もの言わぬ患者を取り囲むスタッフたちの異様なまでに熱気を帯びた連帯感にも、同様の力学がはたらいている。

　もっとも、こうした親密な関係をどのように設置するかについては、それぞれの集団にそれぞれの工夫があった。一夫一婦制も核家族もその一つにすぎない。じっさい、現代の家族も、共同家族、週末同居、ルームシェアというふうに、多様なかたちを模索している。が、その空間はいまもってｎＬＤＫ─ｎは家族の成員数マイナス１である。［　Ｄ　］主婦は個室ではなく、夫婦の寝室もしくは台所にしか居場所をあてがわれてこなかった─というふうにあまりにも画一的である。多様化した家族の実態に住宅の構造は対応していない。これは現代のような都市社会では、住宅が可処分資産になっているためと考えられる。処分を容易にするには、現代の家族モデルに標準的な造りになっている必要があるからだ。

　家族は、生き物としての子どものいのちを育むとともに、社会の成員として育てる、そういう養育の場所である。が、それは社会のルールを仕込む場所としてあるのではない。すでに見たように、しつけに先立って、親しくない他のひとたちとの契約という社会的関係が成立する前提となるべき、他者への信頼というものを育む場所として、それはある。そのなかでひとが身につけるべき共存の習慣を、子どもは、大人がわざわざ教えなくても大人を見て勝手に学ぶ。だから、大人を見て、そして大人に見守られて、子どもが「自然に育つ」ような場を、家庭のうちに、あるいは社会のうちにきちんと用意できているということ、これが「養育」のあるべきかたちである。そして、信頼の関係から契約の関係へと子どもが移行してゆく、その媒介となるのが、家族での、地域での生活である。

　「見て見ぬふりをする」と「見ぬふりをして見る」というのは、おなじことのように聞こえるが、そのあいだにはじつは並々ならぬ温度差がある。乗客が他の乗客に「迷惑」をかけられているのに、「ケリフジン」だとおもいながらも、注意した後の展開が怖くて身動きできない。しかたなく「見て見ぬふりをする」。これは前者の、傍観を決めこむ例である。

　家庭の事情で子どもが泣きじゃくりながら通りを駆け抜けるのを見、すぐにでも声をかけてやりたいところだが、その場しのぎの解決にしかならないことを知っていて、だからだれかれとなく、無茶をしないかと黙って遠目に見ている光景。見ぬふりをしてちゃんと見ているという、これは後者の例である。よほどのことがなければ口を出さない。裏を返せば、よほどのことがあればちゃんと口を出す。路地、商店街といった職住一致の生活空間にはそんな近所づきあいが、ありえた。「育てる」などといわずとも、そこにいれば子どもが「見ぬふりして見る」大人たちに囲まれて「勝手に育つ」、そのような場が。じっさい子どもたちは近所の大人たちを、「おじさん」「おばさん」と擬似家族用語で呼んでいた。

　こうした周囲のまなざしはやがて子どもたちには不快なものになってゆく。この粘りつくようなまなざしがとにかくしくて、子どもはそこから出てゆくことばかり夢みるようになる。が、４何層もある集合住宅に一度暮らしてみて、あるときはたと気づいた。見るでもなく、見ないでもない、「見ぬふりをして見る」というグレイゾーンがここではなりたたない、と。人びとの集住のかたちが、町なかという地べたのものではなくて、ビルという立体のものになると、個々の家は鉄の扉で閉ざされ、内の気配はうかがえない。たがいに顔を合わせるのはたまたま乗り合わせたエレベーターの中でだけ、ということになる。たがいに見るか見ないかのいずれかになり、「見ぬふりをして見る」というグレイな関係が困難になる。

　たがいに出自を大きく異にする人びとがたまたま同一地域に住まうことになり、マンションや公団住宅に住まうことで、各家族が内へと閉じてしまい、都市の商店街や路地のようにたがいに勝手に出入りできるような開放性が地域から消えていった。食材も全国チェーンのマーケットで購入し、気候や災害との闘いも、建物の機能改善や自治体の公的対策に依存するようになり、住民が協同で事に当たるということが少なくなった。ソーシャル・サーヴィスのコオンケイを受ける（あるいは、それを買う）ことで、身近なひとの生老病死に協同して当たることが少なくなった。それにともない、子どもたちもまた地域社会で十分にもまれることもないままに、それぞれの家庭から、そして学校から、いきなり公的空間へ、つまりは社会に出る……。５いきなり本番、というわけだ。

（鷲田清一『〈ひと〉の現象学』より）

問１　傍線あ～おの漢字の読み方を平仮名で記せ。

あ　排　泄　　い　浸れて　　う　逝　去　　え　産　着　　お　装　束

問２　傍線カ～コのカタカナを漢字に直せ。

カ　シンボウ　　キ　ソマツ　　ク　ヤッカイモノ

ケ　リフジン　　コ　オンケイ

問３　空欄［　Ａ　］～［　Ｄ　］に入るもっとも適切な語を次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア　かえって　　イ　つまり　　ウ　たとえば　　エ　が

問４　傍線１「そういう理由」とは、どういう理由か。次の説明文の空欄［　ア　］～［　ウ　］に入る適当な語句を、［　ア　］は七字、［　イ　］［　ウ　］は九字で本文中からそれぞれ抜き出せ。

［　ア　］では、［　イ　］のを避けるために、［　ウ　］が欠かせないという理由。

問５　傍線２「「しつけ」の基礎」とあるが、これに必要と考えられているのはどのようなものか。本文中の語句を用いて四十字以内で説明せよ。

問６　空欄［　Ⅰ　］に入る漢字二字を答え、慣用表現を完成させよ。

［　Ⅰ　］にかける

問７　傍線３「〈いのち〉のベーシックスにふれる経験は、じっさいにはどんどん削除されてきている」とあるが、筆者はそれによってどのような事態がもたらされると危惧しているか。それがわかるもっとも適切な一文を探し、最初の五字を抜き出せ。

問８　空欄［　Ⅱ　］に入る漢字三字の語句を本文中から抜き出せ。

問９　空欄［　Ⅲ　］に入るもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア　あらゆる差異を乗り越えて、人びとに共通の幻想を抱かせるための基礎となる

イ　次々とイメージを変容させつつ、より大きな連帯感を集団に作り出してきた

ウ　特定の役割をもつ人びとを励まし、人びとを心理的な絆で強く結びつける

エ　現代の家族のように多様な実態を生み出し、それぞれの集団の画一化を阻止する

オ　どんな集団にも容易に浸透してゆき、集団の構成原理としてはたらく

問10　傍線４「何層もある集合住宅」とあるが、そのような住宅が地域の人間関係や暮らしのあり方にどのような問題をもたらしていると筆者は考えているか。本文の記述に即して百字以内で説明せよ。

◎問11　傍線５「いきなり本番」とあるが、どういうことか。かつての地域社会での養育のあり方と現代のそれとの違いがわかるように、本文中の語句を用いて百三十字以内で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　あ＝はいせつ　い＝ひた（れて）　う＝せいきょ

　　　え＝うぶぎ　　お＝しょうぞく

問２　カ＝辛抱　　キ＝粗末　　ク＝厄介者　　ケ＝理不尽　　コ＝恩恵

問３　Ａ＝エ　　Ｂ＝ウ　　Ｃ＝ア　　Ｄ＝イ

問４　ア＝閉じられた場所　イ＝確執や悲劇が起こる　ウ＝むきだしでない関　　係

問５　Ａじぶんが家族に無条件に肯定されたという経験により築かれる、Ｂ他者への信頼と安心。（３９字）

Ａがなければ全体０。

Ａ＝６〔別の表現でも文中の語句を使って説明していれば可。〕

Ｂ＝４〔「信頼」がなければ不可。「安心」がなければ減点２。〕

問６　手塩

問７　そして、そ

問８　想像力

問９　オ

問１０　Ａ職住一致の平らな生活空間が持っていた地域の開放性は、Ｂ出自の異なる人々が立体的に閉ざされた空間に住むようになって失われ、Ｃ各家族も内へと閉じて互いの交流が減り、Ｄ住民が協同で事に当たるということも減少した。（１００字）

Ｃ・Ｄがなければ全体０。

Ａ＝２〔「職住一致」「開放性」という内容がなければそれぞれ減点１。〕

Ｂ＝２〔「出自が異なる」「閉ざされた」という内容がなければそれぞれ減点１。〕

Ｃ＝３／Ｄ＝３

問１１　Ａかつて子どもは職住一致の生活空間で「見ぬふりをして見る」大人たちに囲まれて自然に育ったが、Ｂ現在はごく狭い範囲の親密な関係しか知らぬまま、Ｃ徐々に共存の習慣を学んでいく場としての地域社会を経由せず、Ｄいきなり契約の関係が求められる社会へ放り出されているということ。（１２９字）

Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄがなければ全体０。

Ａ＝３〔かつての地域社会での養育の内容が文中の語句を用いて書かれていれば可。〕

Ｂ＝２〔「親密な関係」または「信頼の関係」という表現がなければ減点１。〕

Ｃ＝２〔地域社会の段階性・中間性が文中の語句を用いて書かれていれば可。〕

Ｄ＝３〔「契約の関係」という表現がなければ減点１。〕